ISSN 1882 - 6997

和歌山県立 文書館だより

もんじょかん

第52号　平成30年7月

「御城内惣御絵図」（部分、和歌山県立図書館蔵）

和歌山城内は、天守、西の丸、二の丸のほか、砂の丸・御蔵丸などにわかれていた。
茶道具類を収めた「御数寄蔵」も城内のどこかにあったと考えられる。

和歌山城再建六十周年

昭和二十年（一九四五）七月九日、空襲により和歌山城天守閣をはじめ、和歌山の城下町は甚大な被害を受けました。今年は、和歌山城が昭和三十三（一九五八）に再建されてから、六十周年を迎えます。

これを記念して、「和歌山城と茶の湯」をテーマに、茶の湯を通じた江戸時代の和歌山城と藩士の仕事について、ご紹介しましょう。

写真１
「和歌山城西の丸図」（和歌山城整備企画課蔵）
現在、紅松庵の建つ付近に御数寄屋があった。
右下に突き出ているのが鳶魚閣。

和歌山城と茶の湯

紀州藩には、茶の湯を仕事とする「御数寄屋頭」という役職があり、千利休の子孫である千宗左（表千家）のほか、中野・千賀・川合・室、のちに住山という家が代々役を勤めました。御数寄屋頭は、部屋の調度や藩主への献茶、参勤交代での随行などが仕事です。

和歌山城内は、藩主が風雅を楽しんだ西の丸と妻子の居住する二の丸にわかれており、それぞれに御数寄屋（茶室）が設けられていました（写真１・４）。

西の丸の御数寄屋では、亥年（文化十二、一八一五）十月十一日に茶会が行われたことが記録に残っています（写真２）。ここには客人の名前が書かれていませんが、城内での茶会ですから、当然藩主でみずから表千家の茶の湯を嗜んでいた、徳川治宝が臨席していたことでしょう。

また、日付から口切の茶会だったと考えられます。口切というのは、その年摘んだ新茶を茶壷に封印して保管・熟成させておき、秋頃に茶壷の口を切って飲むことです。

この日は、表千家九代了々斎が亭主で、床の間に沢庵和尚の師一凍和尚の掛軸を用い、花入は表千家初代の江岑による舟型で銘長生丸を、茶碗は安南（ベトナム製の陶器）など、京都の表千家から紀州へ道具を持参しての茶会でした。

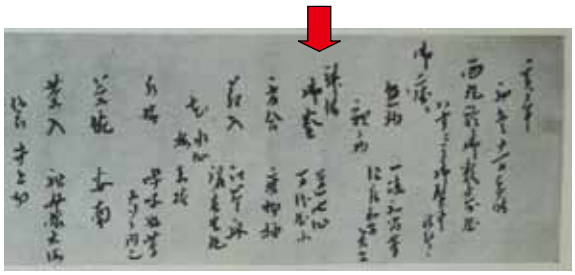


写真２　「了々斎会記」
『紀州徳川家蔵品展観目録』（部分）より
（当館蔵）

ただし、釜と水翻（建水、不要になった湯水を捨てる容器）は、紀州藩所蔵の道也作で小型の万代屋釜、カネ（金属製）の建水を拝借しています。了々斎が自前で用意したものではなく、紀州藩側の設備や道具を利用した場合、「御床」・「御釜」あるいは「御水翻」のように、「御」字を付けて区別しています。

紀州徳川家伝来道具

紀州徳川家では、釜や水翻以外にも、多くの茶道具や絵画・墨蹟・刀剣・甲冑などの美術工芸品を所蔵していました。

当館には、紀州藩の藩政史料の一部が伝わっていますが、残念ながらその中に「蔵帳」といわれるような什物管理台帳はありません。ですが、昭和二年（一九二七）同八・九年（一九三三・三四）に行われた、売立の際に作成された目録から、紀州徳川家伝来の道具類がどんなものであったのか、ある程度判明します。

茶道具では、足利将軍家が所蔵した東山御物、徳川将軍家が所蔵した柳営御物をはじめ、松江藩主松平不昧によって定められた大名物や名物といった茶器を多数所持していました。

ほかに、寛永十九年（一六四二）表千家が紀州藩に召出されることが決定した時に、表千家から献上した茶道具があります（当館蔵「系譜」七五六六）。利休の師と擬せられる紹鷗の作った茶杓銘あさぢと利休が所持していた水翻銘大脇指などを所蔵していました（写真７）。

道具類の維持管理

このような道具類の維持管理を、御数寄屋頭とその配下の御数寄屋坊主たちはどのように行っていたのでしょうか。

写真３　葵紋入長持
貼紙に「御数寄□□（道具）御数寄屋頭預」とある。
（和歌山城整備企画課蔵）

そのヒントとなるのが、和歌山城で展示されている長持です（写真3）。この長持には、「御数寄□□（道具）御数寄屋頭預」と書かれた貼紙が残っていることから、こまごまとした茶道具などをまとめて収納していたのでしょう。

長持は保管のためだけでなく、万が一火災が発生し避難させる場合、一度に多く持ち運べるという利点もありました。鳥取藩では、所蔵道具のグループ分けとランク付けがなされており、一番に「御持出し」として、家康・家光の書や茶入・茶壺等、緊急の際は一番に避難させるべき道具があげられています。

紀州徳川家でも由緒や権威を象徴する品物や「駿府御分物（おわけもの）」といわれる、家康の形見分けの品などが大切に保管されていたはずです。

火事の時は

写真4　二の丸の御数寄屋と穴蔵
「和歌山二ノ丸大奥当時御有姿之図」
（和歌山城整備企画課蔵）

長持以外にも、紀州藩では火災に備えた対策をおこなっていました。それが、御殿内の敷地に設けられた「穴蔵」です。西の丸・二の丸の御殿が描かれた絵図を見ると、敷地内に「穴蔵」と書かれている場所があります（写真4）。

これまでに指摘されている通り、穴蔵は恒常的に用いられた倉庫ではなく、火災時に、手許の貴重品や調度として使用しているものを緊急避難させる場所だったと考えられます。

道具類の保管場所

大量の道具類は、常日頃どこでどのように保管されていたのか、これまでよくわかっていませんでしたが、ひょんなことから明らかになってきました。

御数寄屋頭の表千家は、ふだん京都で暮らしており、藩での御用を勤める時は和歌山に滞在していました。知行取の藩士でありながら、和歌山の城下町に拝領屋敷がなかったのです。それでは長期滞在時に不便なため、三木町の町人地の一角に屋敷を構えていました（写真5）。

写真5　「和歌山絵図」
（早川家文書45、当館蔵）
星印付近に表千家屋敷跡碑が建つ。

そんな表千家の後ろ隣りだったのが、橋本家です。『和歌山史要』によると、幕末から明治にかけて橋本宗忠・元安のふたりが表千家に師事したとあり、古くから交流があったと推定されます。そこで橋本家の「系譜」（一一一三九）を確認してみたところ、五代目源十郎に対して次のような命が下されていました。

一元文四己未年五月廿三日
御城御近所若火事之節
御数寄蔵（江）罷出可相勤旨被
仰付候

つまり、御城の近所でもし火災が発生したら御数寄蔵へ行って勤めるよう仰せ付けられた、とあります。この一文のおかげで、城内のどこかに「御数寄蔵」のあったことがわかりました（表紙写真）。

また、火災時の御数寄蔵での勤めというと、蔵の道具を避難させたりすることを想像しますが、緊急時に大量の道具類をすべて安全に移送することは、まず不可能です。一般には、火災が起こると土蔵の窓と扉を閉め、隙間を用心土（準備しておいた粘土）で塞ぎ、蔵の内部に火が入らないよう目塗りをしました（写真6）。火災時の勤めとは、このような作業だったのかもしれません。

写真6「目黒行人坂火事絵巻」
国立国会図書館ウェブサイトより

橋本源十郎は、城の警備を担当する大番組であったことから火災時の対応を命じられた可能性が高いと考えられますが、それだけではなく、表千家と後ろ隣りであったことも関係しているのではないか、とついつい想像を膨らませてしまいます。

道具類のその後

写真7　黄瀬戸水飜銘大脇指
『紀州徳川家蔵品展観目録』（当館蔵）

こうして、大切に伝えられてきた道具類でしたが、昭和二年に売払われることになりました。前述した茶杓銘あさぢと利休が所持していた水飜銘大脇指（写真7）も出品、いずれも落札され、現在茶杓は個人蔵、大脇指は大阪の湯木美術館に所蔵されています。

（砂川佳子）

＊参考文献＊
山下真由美「『御国残り御道具帳』翻刻」『鳥取県立博物館研究報告』52・53号　二〇一六年
髙橋克伸「紀州藩主屋敷の景観―文献にみる二之丸大奥の穴蔵について―」『和歌山城と城下町の風景　資料集』二〇一五年
三尾功「表千家の和歌山屋敷について」木国文化財協会発行『木の国』27号　二〇〇一年

政治情報をもとめる幕末の民衆
―紀州園部の「風説留」―

「風説留」とは

一般に、新聞・雑誌、ラジオ・テレビ、インターネットと、その供給主体は多様化してきたとはいえ、現代社会は安定的に政治情報を入手しうる環境にあります。むしろその氾濫に翻弄されているといったほうがよいかもしれません。

通信手段や印刷技術がそれほど発達していない江戸時代の日本でも、たしかに瓦版・読売によって天変地異や珍事の速報が発信されてはいました。しかし、こと政治情報となると話は別です。

江戸時代の幕藩権力は、身分制を基礎とする秩序を維持するべく、百姓・町人（民衆）の政治情報への自由なアクセスを認めていませんでした。政治情報はあくまで支配権力が与えるものだったわけです。

それにもかかわらず、一九世紀、とりわけペリー来航時の日本では、民衆が政治情報を求め、あらゆる手段を用いて収集し記録・筆写して冊子に綴り、さらにそれを回覧する、というような社会が成立していたのです。民衆が情報を書き留めたその冊子こそ「風説留」といわれるものです。

風説留は一九九〇年代以降ようやく注目されはじめ、現在でも全国各地で発見されています。なかでも、紀伊国日高郡北塩屋浦（現御坊市）の在村蘭医羽山大学（一八〇八～七八）が収集した情報を書き留めた「彗星夢雑誌」は、嘉永六年（一八五三）のペリー来航から明治二年（一八六九）の版籍奉還まで幕末維新政治過程の全時期をカバーし、冊数にして全一〇九冊（うち二冊欠）にものぼる大部なもので、風説留の白眉といえる貴重な史料になっています（中川木材産業所蔵）。

「紀伊国名草郡園部村園部家文書」

もっとも、風説留の事例は十分といえるほど明らかにされているわけではありません。当館に寄託されている「園部家文書」の整理の一環として、東京立川にある国文学研究資料館の所蔵になる「紀伊国名草郡薗部村園部家文書」（以下、本文書）を調査した結果、こちらのほうに風説留が数冊収められていることを発見しました。そこで小文では、その風説留とそれを書き留めた人物について紹介することにします。

本文書は、明治前期に区長や県会議員をつとめたのち、県会議長として和歌山県政界で重要な役割に担った園部三郎（一八五三～九三）を輩出した家に伝来したものです。この園部家は、当館寄託史料の「園部家文書」を蔵する園部家と姻戚関係を有していますが、別の家です。両家に伝わる文書群は、いずれも紀ノ川下流域の和歌山市郊外にあたる旧名草郡や有功地区の歴史を明らかにするうえで非常に重要な史料です。

地方文書を中心とする本文書のなかに、三郎の父で幕末維新を壮年で迎えた三郎兵衛宗昭の個人文書が収められています。小文の紹介する風説留は、三郎兵衛宗昭が書き留めたものになります（写真1）。

写真1
風説留「異船渡来幕府瓦解萌」

園部三郎兵衛宗昭の履歴

園部三郎兵衛宗昭は、本文書中には「三郎」と出てくることが多いのですが、系図には「三郎兵衛」と表記されています。息子の三郎と区別するためにも、小文では「三郎兵衛」と記すことにします。

三郎兵衛が生まれた園部家は百姓身分でありながら、紀州徳川家の藩祖頼宣より「旧家豪族之賞」を与えられたという由緒を有する家柄でした。また代々の当主は、庄屋・肝煎をつとめ地域運営を担う一方、紀州徳川家や安藤家・水野家に「勤仕」し、武家社会の末端につらなってもいたのです。

三郎兵衛は文政九年（一八二六）彦九郎範宗の次男として生を受けました。幼名は右馬之助。天保九年（一八三八）一三歳のとき出郷、高野山安楽院にて勉学に励み、真言宗つながりで仁和寺宮済仁法親王へ「奉仕」したのちに帰郷します。

その後、確たる時期は定かでありませんが、慶福が藩主をつとめている時期（一八四九～五八）の紀州徳川家に「勤仕」しています。三郎兵衛の父は、治宝・斉順治世期の紀州徳川家に「勤仕」したり園部村の庄屋を担ったりしていたようですが、三郎兵衛は兄と同様、園部村にとどまることを選ばず、紀州徳川家への「勤仕」に励みます。

三郎兵衛は主として紀州徳川家の民政部門で自分の居場所を見つけたようで、安政期（一八五四～六〇）以降、牢妻・海士・日高郡の「郡吏職」、すなわち代官所の役人として「奉職」しています。

平時であれば民政役人で人生の幕を閉じたかもしれませんが、そこは幕末という動乱の時代。文久三年（一八六三）、三郎兵衛は人生の大きな転機を迎えます。

尊王攘夷が高揚していたこの年、大和五条で天誅組が挙兵、その後十津川郷に移り、南山各地でゲリラ戦を展開します。これに対し、紀州藩はその鎮撫にあたるとともに、領内の警備を固めさせました。この天誅組の変に際し三郎兵衛は、木本浦に置かれていた牟婁郡奥熊野の代官所陣営で「防禦陣備えの策略」を提議。領内警備に一役買ったことが評価され、紀州藩より「感賞を賜」っています。

『南紀徳川史』第一一冊に収められている「紀州各郡地士姓名」には、「薗部三郎大夫」なる人物が「文久三亥年地士に」なった旨が記されています。この三郎大夫が三郎兵衛の誤記であれば、その「感賞」が地士への引き上げ（実際は

地士株の買い取り？）だった可能性はあります。天誅組の変という有事を通じて、三郎兵衛の園部家は「旧家豪族」から地士に身分上昇させたかもしれないということです。

翌元治元年（一八六四）からは「朝敵」長州藩を「征討」する戦争（幕長戦争）が始まり、三郎兵衛もこれに深く関与することになります。第一次幕長戦争に「小荷駄方総督」（輜重隊長）として出陣。征長軍の解兵に際し三郎兵衛は「俸禄奉還帰耕」を願い出て、園部村に戻りました。

しかし慶応二年（一八六六）第二次幕長戦争の開戦にあたり、三郎兵衛は紀州藩より「報国尽力これ有るべき旨公命を拝し」て「遊撃隊取締」（紀州藩の正規兵に編入された農兵部隊の幹部）として出陣。幕府軍の大敗北で終戦するも、帰藩した際には「芸術出精」として「年々銀五枚」の「褒賞」が与えられています。

三郎兵衛のその後の消息は不明です。明治四〇年（一九〇七）にこの世を去るまで、悠々自適の生活を送っていたのでしょうか。

「異船渡来幕府瓦解萌」の内容

以上のような履歴から、三郎兵衛は武家社会の一員に列する志を有しており、政治意識も高かった人物と推測されます。だからこそ、いろいろと自分で調べては記録し冊子体にまとめたものの一部が本文書に残っているわけです。

たとえば、安政三年（一八五六）の年紀をもつ「御領分記」なる簿冊は、三郎兵衛が代官所役人時代に紀州藩の検地や税法、諸産物に関する地方仕置書などを写し取ったものです。天保八年（一八三七）大塩の乱に関する「大塩平八郎一件留書」、嘉永六年（一八五三）のペリー来航に関する「異国船浦賀江渡見聞扣帳」のほか、「異船渡来幕府瓦解萌」と題された風説留なども、三郎兵衛の政治意識が反映されたものといってよいでしょう。

「異船渡来幕府瓦解萌」は、帳面に編年体で書き留められたものではなく、幕末維新当時にそのつどつど情報を写し取って作成した個別の綴りを、のちにアト・ランダムに編綴しなおした簿冊体となっています。したがって「異船渡来幕府瓦解萌」との表題も、三郎兵衛が編綴した際に付されたものと考えるのが自然ですが、その時期については「幕府瓦解」後であること以外未詳です。

内容的には、ペリー来航から慶応三年（一八六七）の大政奉還までの諸事件に関連する文書類、朝廷から出された達し、幕府や紀州藩の触れ、諸藩の届書・意見書、個人の建白書、張紙・落書・偽文書などから成り立っています。

写真2
四国艦隊下関砲撃事件絵図

一般に風説留には、その情報をいつ、誰から、どういうルートで入手したかが記されています。ところが「異船渡来幕府瓦解萌」にはその記載がありません。三郎兵衛が紀州藩の代官所や軍隊がらみで収集したことは容易に推測できますが、情報＝文書の具体的な出所がはっきりしないのは残念です。三郎兵衛が直接聞き取った風聞などが書き留められていない点と合わせ、非常に惜しまれます。

こうした制約を踏まえたうえで、「異船渡来幕府瓦解萌」のもっとも特徴的な点を挙げると、対外関係の情報がかなりのウエイトを占めているということです。三郎兵衛が「外圧」に敏感に反応していたことがよくうかがわれます。

ペリー来航に関する「嘉永六年丑六月三日浦賀表江異国船渡来之節略記」に加え、和親条約や修好通商条約の外交交渉関連文書が転写されていることはもちろん、文久元年（一八六一）ロシア軍艦ポサドニック号による対馬占領事件や元治元年（一八六四）イギリス・フランス・オランダ・アメリカが連合して長州藩に報復した四国艦隊下関砲撃事件など、欧米列強が日本に武力行使を実施した事件に関する文書・絵図も写し取られています（写真2）。

写真3
亜魯英仏盟約之和解

また、駐日外交官同士の往復文書などの写し（邦訳）も見られます。なかには、文久二年（一八六二）に全国的に流布した「亜魯英仏盟約之和解」も含まれています（写真3）。これは、アメリカ・ロシア・イギリス・フランスが共同して日本を分割占領しようと交わした密約の邦訳版という体で出まわった偽文書で、日本人の攘夷意識を煽るために国内で作成されたものと考えられます。いずれにせよ、欧米列強の対日方針や戦略にかかわる情報が積極的に集められているわけです。

さらに極めつけは、三郎兵衛が時期を遡って対外関係にからむ情報を収集していることです。これは大きく二点に分けられますが、一つはアメリカやロシアに流れ着いた日本人の「漂流記」。もう一つは文化三年（一八〇四）のロシア使節レザノフ長崎来航と、同五年六年のフヴォトフ樺太・択捉襲撃に関する「文化三丙寅魯西亜国松前騒動聞書写」です。

ペリー来航を機に日本の国家意識や対外的危機感を強く抱くようになっていた三郎兵衛であったればこそ、幕末維新期の対外問題の淵源や系譜を辿ろうとしていたのかもしれません。（平良　聡弘）

《参考文献》
・宮地正人『幕末維新期の社会的政治史研究』（岩波書店、一九九九年）
・岩田みゆき『幕末の情報と社会変革』（吉川弘文館、二〇〇一年）
・落合延孝『幕末民衆の情報世界』（有志舎、二〇〇六年）
・平良聡弘「幕末動乱のなかの八木」（『図説丹波八木の歴史』三巻、南丹市、二〇一三年）

平成二十九年度新収古文書の紹介

平成二十九年度に当館が寄贈・寄託・購入によって収集した古文書の概要を紹介します。これらのうち、小山家文書を除く古文書については、これから番号付け・目録作り・複製物作成など、皆様に御利用いただくための整理を進めていきます。なお、整理中の文書は、出納に時間がかかったり、御利用できない場合があります。御利用にあたっては、事前に当館に御連絡ください。

小山家文書（美浜町三尾）

当館で従来「龍王神社文書」として公開されていた文書二二八点が、実は旧日高郡三尾浦の庄屋文書「小山家文書」の一部であったことが判明し、本来の所蔵者から改めて寄託いただきました。

これらは、昭和二十年代に財団法人日本常民文化研究所（当時）が行った全国漁村の古文書調査で借り出されたまま、長く未返却だったものでした。

既に「龍王神社文書」として整理・公開されていますので、利用可能です。

岩﨑家文書（和歌山市紀三井寺）

本紙第四三号で紹介した岩﨑家文書の追加寄託約二〇〇点です。

同家所有地に関する文書のほか、これまで公共図書館での蔵書が確認されていなかった和歌山高等女学校、修徳高等女学校及び海南中学校の同窓会・校友会の雑誌や小学生の文集などがあり、アメリカ移住者からの年賀状も含まれます。

本紙第四八号で取り上げた和歌山高等女学校を卒業して教師となった岩﨑かつゑの活動や、第五〇号で紹介した紀三井寺村からの移民事情の研究に厚みを増す資料といえます。

宮内省梨本宮附別当三雲敬一郎家文書

『南紀徳川史』の「名臣伝」に名を遺す紀州藩士三雲九左衛門の子孫で、慶応三年（一八六七）に和歌山で生まれた三雲敬一郎は、和歌山中学校を卒業後、兵庫県、東京府の職員を経て宮内省職員となり、大正十一年（一九二二）には皇族であった梨本宮守正王附きの事務官、そして昭和六年（一九三一）には同宮附きの別当（家政担当の長官）となります。

敬一郎の梨本宮附宮内事務官・別当の職務に関する書類や記念写真、敬一郎及び妻の美代子宛ての書簡、先祖伝来の紀州藩士三雲家文書（家譜・勤書等）など約三〇〇点を古書店から購入しました。

橋本家文書Ⅱ（御坊市湯川町小松原）

当館寄託「橋本家文書」と同出所で、和歌山県下第一の大地主として知られた橋本家の古文書です。

同家所有地や和歌山水力電気、所有建物を貸し出していた医院に関する書類など約三〇点で、古書店から購入しました。

八塚家御通し之写（紀の川市粉河）

当館蔵「八塚家文書」と同出所と思われる文書で、古書店から購入しました。

八塚家の「地士」としての御用留帳一冊で、嘉永元年（一八四八）から同五年までの記載があります。

粉河白水座劇場建築工事図面（紀の川市粉河）

大正三年（一九一四）、粉河駅前で旧粉河町の置屋組合によって開業し、昭和三〇年代終わり頃まで存続したという劇場白水座の建築図面一一点です。図面の作成は明治四十四年（一九一一）です。古書店から購入しました。

宮本守中・道夫関係資料

明治・大正期の新宮町（現新宮市）で医業に携わりながら新聞『熊野新報』を創刊し、同町長も務めたことで知られる宮本守中と、その子息で同町・東牟婁郡七川村（現古座川町）・同郡田原村（現串本町）で医業を営むとともに七川村長をも務めた道夫の父子が取得・収集した資料約一九〇点を、御子孫から寄贈いただきました。

その多くは道夫が収集した関東大震災、二・二六事件、戦争に関する新聞やグラフ誌ですが、父子宛ての感謝状・表彰状、守中の和歌山医学校卒業証書、熊野新報社関係者芳名録、道夫が逃げてきた共産主義者を匿った際に取り上げたという貴重な同人誌『腕と腕』（昭和四年（一九二九）の創刊号から三冊。現古座川町高池で発行。公共図書館に蔵書なし。）などもあります。

平成二十九年度公文書の引継・収集

文書館には、和歌山県庁の永久保存文書のうち、事案完結後二〇年を経過したものが引き継がれます。また、知事部局・県議会事務局・選挙管理委員会・監査委員事務局・労働委員会事務局・収用委員会・海区漁業調整委員会・内水面漁場管理委員会が保存期間満了により廃棄する有期限文書のうち歴史的価値があるものを選別し「歴史文書」として収集しています。

平成二十九年度に文書館に引き継がれた永久保存文書は三〇六冊です。平成五年開館以降の累積冊数は、一二三、〇五九冊になりました。

歴史文書の収集冊数は四三九冊で、そのうち四〇七冊が知事部局本課から収集したものです。この年、知事部局本課全体では、合計九、七四二冊の文書が廃棄されていますので、そのうちの四・二%が、歴史文書ということになります。開館以降の歴史文書の累積冊数は、七、五二七冊です。

これらの文書は、文書館で保存・整理され、事案完結後三〇年が経過し、且つ個人情報保護などの問題がなくなったものから御利用いただけるようになります。なお、永久保存文書のうち、個人情報が記載されているものなどについては、情報公開制度に則り、県庁情報公開コーナーでの御利用になります。

和歌山県博物館施設等災害対策連絡会議（和博連）平成二十九年度公開研修会
各地でおこなわれている文化財をまもる取り組み

文書館が幹事を務める和歌山県博物館施設等災害対策連絡会議（和博連）は、和歌山県内の博物館や資料館、市町村教育委員会など七八組織が加入する団体です。平時は博物館施設や文化財の防災・減災等について研究や研修を行っており、万一の災害時には会員館同士、或いは県内外の諸機関と協力して「文化財レスキュー」を行います。

和博連は、平成二十九年度、「地域に眠る「災害の記憶」と　文化遺産を発掘・共有・継承する事業」（次頁参照）の協力を得て、新宮市と和歌山市で二度の公開研修会を開催し、文化財防災ネットワークの先進事例や被災資料の応急処置の実際について、市民の皆さんとともに学びました。

新宮会場（新宮市福祉センター）
平成三十年二月十五日　参加者二一名

①「三重県博物館協会等による災害に対する取り組みについて」
三重県総合博物館調査・資料情報課主査　**間渕創 氏**

②「水損資料応急処置ワークショップ～「史料の救命士」ボランティアへのお誘い」
神戸大学地域連携推進室特命准教授　**松下正和 氏**

和歌山会場（和歌山市立博物館）
平成三十年三月十四日　参加者五八名

①「和歌山市寂光院の文化財緊急調査について」
和歌山県立博物館　**前田正明主任学芸員**
和歌山県教育庁文化遺産課　**御船達雄主査**
和歌山県立近代美術館　**藤本真名美学芸員**

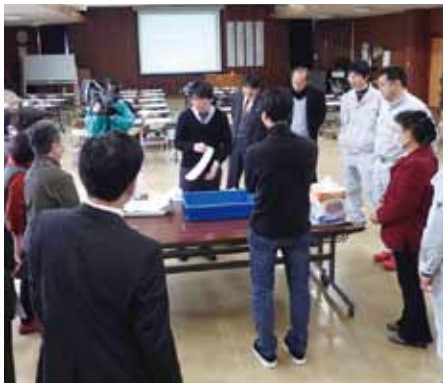
②「鳥取県中部地震の現状と被災史料への取り組み―鳥取県西部地震との比較を通じて―」
鳥取大学地域学部教授　**岸本覚 氏**

◆新宮会場◆

新宮会場では、当該地域が県庁所在地から遠く、かつ災害の最頻発地域で、お隣の三重県との県境を越えたネットワークの構築が課題であることから、平成二十八年度も和歌山市で御講演いただいた三重県総合博物館の間渕さんに再登板していただきました。間渕さんには、平成二十三年の紀伊半島大水害の時に熊野地域でレスキュー活動を行ったり、防災マニュアル等の整備を進めている三重県博物館協会や「三重県歴史的・文化的資産保存活用連携ネットワーク」などの連携の実際についてお話しいただきました。

また、神戸大学の松下さんには、水損資料の応急処置についてのワークショップを開催していただきました。新宮市では、平成二十九年十月の台風二一・二二号により大規模な浸水被害がありました。その際に被災した紙資料を自力で乾かした方もおられ、熱心に参加していただきました。

間渕創氏の講演


松下正和氏のワークショップ風景

◆和歌山会場◆

和歌山会場では、まず平成二十九年四月以降に、取壊し予定の寺院で急遽行われた和歌山市立博物館・県立博物館・近代美術館・文書館・県文化遺産課・歴史資料保全ネットわかやま・建築物のヘリテージマネージャーの方々による緊急調査の経験を、今後の災害対応にも活かせるのではないかということで報告されました。（なお、この調査の成果は、「和歌山市寂光院の文化財緊急調査概報」として『和歌山市立博物館研究紀要第三二号』に掲載されています。）

また、和歌山県と同様に人口・大学・文化財保存施設の少ない山陰地方において発生した鳥取県西部地震（平成十二年十月六日発生）や鳥取県中部地震（平成二十八年十月二十一日発生）に対し、地域の大学・地域史研究団体（鳥取地域史研究会）、ボランティア「山陰史料ネット」・自治体の文化財担当者等が連携して行った文化財パトロールやレスキュー活動の経験や課題について、鳥取大学の岸本覚氏からお話しいただきました。

岸本覚氏の講演

これまでの研修会で学んだなどを踏まえ、和博連では、今後県文化遺産課等と協議して、「和歌山県地域防災計画」に基づく文化財防災の具体的なシステムや手順、マニュアル等を整備していく予定です。

平成二十九年度文化庁補助金事業
地域に眠る「災害の記憶」と文化遺産を発掘・共有・継承する事業

文書館は例年、県立博物館、県教育庁文化遺産課、和歌山大学や県外の研究者、民間団体「歴史資料保全ネット・わかやま」と共同して文化庁補助金事業「地域に眠る「災害の記憶」と文化遺産を発掘・共有・継承する事業」を行っています。

この事業は、和歌山県内の地震・津波・洪水など過去の災害に関する記録や記念碑、言い伝えなどを再確認して今後の教訓とし、併せて地域の古文書、仏像、お祭りなど文化財の確認調査を行い、将来の被災に備えるものです。

平成二十九年度は、新宮市と東牟婁郡北山村で事業を実施しました。

事業の成果は、左記のとおり地元で長年防災などに携わっておられる研究者を交えて現地学習会「歴史から学ぶ防災」や防災ワークショップ（学習会直後に開催）を実施するとともに、冊子『先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝えるⅣ』を発行し、両市村内で全戸配付しました。（同冊子は、文書館や県立博物館で配付するとともに、県立博物館ウェブサイトでも公開しています。）

また、平成二十九年度は、前頁の和博連公開研修会を共催しました。

平成三十年度は、日高郡日高町及び西牟婁郡白浜町で同事業が始まりました。

災害慰霊碑の調査風景
（平成29年9月13日　新宮市熊野川町九重）

現地学習会　歴史から学ぶ防災2017 ―命と文化遺産とを守る―

二月二十四日　於：東牟婁総合庁舎　参加者八四名

①「宝永地震津波と新宮」
和歌山県立博物館　前田正明主任学芸員

②「山門部材に記された安政地震津波の記憶」
神戸大学大学院人文学研究科特命講師　木村修二氏

③「石碑に刻まれた過去の土砂災害」
和歌山県立文書館　藤隆宏主査

④「熊野川流域の自主水防家屋『上がり家』とその今日的意味」
和歌山大学南紀熊野サテライト客員教授　鈴木裕範氏

⑤「地域の災害史の共有により減災をめざす」
減災カフェ主宰　上野山巳喜彦氏

二月二十五日　於：北山村村民会館　参加者五〇名

①「北山村とその周辺の土砂災害の危険性」
和歌山大学災害科学教育研究センター客員教授　後誠介氏

②「火災を免れた仏像」
和歌山県文化遺産課　三本周作副主査

③「北山村周辺地域の秋祭りとどぶろくの醸造―その特色と技法の継承をめぐって―」
和歌山大学紀州経済史文化史研究所特任准教授　吉村旭輝氏

④「北山村の記録と歴史災害」
歴史資料保全ネット・わかやま　砂川佳子氏

⑤「誰にでもできる水濡れ資料の応急処置法」
神戸大学地域連携推進室特命准教授　松下正和氏

文書館の利用案内

■利用方法

◆閲覧室書棚に配架している行政資料、参考資料は自由に閲覧してください。

◆複写を希望される場合は、複写承認申請書に記入のうえ受付に提出してください。複写サービスは有料です。

◆閲覧室受付にある目録等で必要な資料、文書等を検索し、閲覧申請書に記入のうえ受付に提出してください。文書等利用の受付は閉館30分前までです。

開館時間

◆火曜日～金曜日
午前10時～午後6時

◆土・日曜日・祝日及び振替休日
午前10時～午後5時

■休館日

◆月曜日（祝日又は振替休日と重なるときは、その後の平日）

◆年末年始　12月29日～1月3日

◆館内整理日
・1月4日
（月曜日のときは、5日）
・2月～12月 第2木曜日
（祝日と重なるときは、その翌日）
・特別整理期間　10日間（年1回）

■交通のごあんない

◆JR和歌山駅・南海電鉄和歌山市駅からバスで約20分

◆和歌山バス高松バス停下車徒歩約3分

ホームページアドレス
https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/

和歌山県立文書館だより　第52号
平成30年7月31日　発行
編集・発行　和歌山県立文書館
〒六四一－〇〇五一
和歌山市西高松一丁目七－三八
きのくに志学館内
電話　〇七三－四三六－九五四〇
FAX　〇七三－四三六－九五四一
印刷　有限会社隆文社印刷所